Osaka University Knowledge Archive

Title	ボナヴァンチュール・デ・ペリエ『笑話集』の構成について
Author(s)	鍛治, 義弘
Citation	Gallia. 1992, 31, p. 46-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10314
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ボナヴァンチュール・デ・ペリエ『笑話集』の構成について

鍛　治　義　弘

かつてない不敬の書とも評された *Cymbalum mundi* の作者であり，刃の上に自らの命を投げ出して果てたとも言われるボナヴァンチュール・デ・ペリエ Bonaventure Des Périers[1] は，マルグリット・ドゥ・ナヴァールの Valet de chambre を勤めたこともありながら経歴もあまり定かではない。そしてデ・ペリエのもう一つの主要作品『笑話集』*Nouvelles Récréations et Joyeux Devis* にも，こうした著者の謎がたちこめている。即ちこの作品は，デ・ペリエの死後1558年に，印刷者 Robert Granjon の序文をつけて出版されたが，刊行本表紙にデ・ペリエの名がはっきり上っているにもかかわらず，16世紀より作者について疑問が出され，Etienne Tabourot はこの作品の作者を Jacques Peletier du Mans と，La Croix du Maine は Peletier と Nicolas Denisot との合作としていた[2]。今日では，作品中にいくつかのアナクロニズムが指摘されているものの[3]，1558年に出版された90話については，デ・ペリエを作者とするのが定説となっている。

さて，所謂短い話を集めたこの『笑話集』に対しては，従来二つの方向から主に光があてられて来ている。第一は Hassell に代表される，個々の話の起源あるいは先の時代・同時代の話との類似を探るものであり[4]，第二は Kasprzyk などにみられるデ・ペリエの言葉のテーマ，使い方からなされる研究である[5]。

---

1) デ・ペリエの経歴については，Lionello Sozzi, *Les contes de Bonaventures Des Périers, contribution à l'étude de la nouvelle française de la Renaissance*, G. Giappichelli, 1965, pp. 9-47 を参照のこと。

2) Krystyna Kasprzyk, Introduction aux *Nouvelles Récréations et Joyeux Devis*, Champion, 1980, p. VIII.

3) *Ibid.*, pp. XV-XVI.

4) James Woodrow Hassell Jr., *Sources and Analogues of the* Nouvelles Récréations et Joyeux Devis *of Bonaventure des Périers*, volume I, 1957, University of North Carolina Press, volume II, 1956, University of Georgea Press.

5) Krystyna Kasprzyk, 《Des Périrs et la communication, Proposition d'une lecture des *Nouvelles*↗

しかし，この『笑話集』は物語の構造，語りの面からみても，実は興味深い位置にある。短い話を集めた物は，16世紀頃まで，大きく分けて次の二つの型があった。第一のタイプは，『デカメロン』の伝統を受けついだ，マルグリット・ドゥ・ナヴァールの『エプタメロン』や Noël du Fail の *Propos rustiques* のような，複数の語り手によって個々の話が語られ，作者によって語りの状況が設定されている枠物語であり，第二は *Cent Nouvelles Nouvelles* や Nicolas de Troyes の *Grand Parangon* のように，複数の語り手を持つが，枠組みを欠いているものである。ところが『笑話集』はこの二つのタイプのいずれとも異なり，一人の語り手によって語られ，しかも語りの状況などの枠組みも持っていない。先にあげた第二のタイプは全体的まとまりを余り考えないで作られたとも言えようが，第一のタイプは枠組みによって，個々の話の主題や時代，登場人物がかなり異なっていても，一応全体的統一をみせている。これに比べると『笑話集』は枠組みもなく，一人称の語り手によって全体が語られるものの，全体的流れがある訳でもなく，個々の話の登場人物や主題も様々で，一見したところ実に散漫な構成であるような印象を受ける。しかし，テクストが果して現在の状態で提示されていたのかを一応考慮の外において（死後出版であるから，完成状態でなかったかもしれず，出版者の手が加わっている可能性もあるかもしれない），デ・ペリエが敢えてこうした構成をとったとすると，実際90の話の間には何らの連関もないのであろうか。また事実このような散漫な構成であるとすれば，そのことは何を意味しているのか。本論は，こうした問いを語り手の面などから検討してみようというものである。

確かに『笑話集』には，『エプタメロン』のような枠組設定はなされていない。しかし，*Grand Parangon* のようにいきなり話が始まるのでもない。デ・ペリエは，第一話を序として始めている。そこでは，先ず，読者に「よく生き，楽しむ」ことを勧めたあと，次のように続ける。

> Voire mais, comment me resjouirayje, si les occasions n'y sont ? direz vous. Mon amy, accoustumez vous y. Prenez le temps comme il vient : laissez passer les plus *chargez* : Ne vous *chagrinez* point d'une chose *irremediable*. Cela ne faict que donner *mal* sur *mal*, croyez moy, et vous *vous* en *trouverez bien*. Car j'ay bien esprouvé que pour cent francs de

---

↘ *Récréations*》 In *Études seiziémistes offertes à M. V.-L. Saulnier*, Droz, 1980, pp. 169-178 ; 《Un exemple de comique subversif : L'Emploi du proverbe dans les *Nouvelles Récréations* de B. Des Périers》, In *Les cahiers de Varsovie*, 8 *Le comique verbal en France au XVI e siècle*, 1981, pp. 219-226.

melancolie n'acquiteront pas pour cent solz de debtes. Mais laissons là ces beaux enseignemens : *ventre* d'ung petit poysson, rions : Et dequoy ? de la *bouche*, du *nez* : du *menton*, de la *gorge*, et de tous noz cing sens de nature. Mais ce n'est rien qui ne rit du *cuer*. Et pour vous y aider, je vous donne ces plaisans comptes[6] (souligné par nous).

冒頭の読者《vous》を引き出しての対話を通して語られるのは，chargez, chagrinez, irremediable, mal, vous trouverez bien, melancolie, そして ventre 以下の体の部分を表す言葉によって明らかになるように，笑いと医学との結びつきであり，笑いの医学的治療効果とも言える。事実デ・ペリエはこの前の文で読者を患者にたとえている[7]。こうした対話体の序文，笑いの医学的効用で思い出されるのは，勿論フランソワ・ラブレーであり，デ・ペリエがラブレーの影響を受けているのは明らかである。そして，このような笑いの効用を授け，読者を助けるために，語り手がおこなおうとするのが，引用文最後に見られる「以下のおかしい話をあなた方に与える」ことなのである。つまり，『笑話集』の90の話は，この序としての第一話で既に，大きなテーマは決定されているのであって，『デカメロン』のように，その日その日で話の主題が異なるわけではない。従って，ごく大きな意味では，『笑話集』は読者を慰めるためにおかしい話を語るというまとまりを，第一話で提示している。

さて，序文としての第一話で始まった90の話相互の間に，全く連関がないかというと，実はそうではない。Sozzi[8]や Harris[9] が指摘しているように，いくつかの話はテーマによって結びついている。しかし，Sozzi が「テーマ」としたものは，より正確には，場所，登場人物の一致・類似と，テーマの類似にわけられる。同じ場所でおこった出来事を語っているのは，ル・マンの XIV, XV とル・マンを中心とするメーヌ地方の XXVII, XXVIII, XIX, パリを舞台とする XXX, XXXI, ポワティエでの XLV, XLVI であり，話の導入にあたって，《Au mesme pays du maine》(XXVIII, p. 131) と言った，関連づけの語句があることもある。また登場人物についてみると，全くの同一人物は，

6) Bonaventure Des Périers, *Nouvelles Récréations et Joyeux Devis*, édition critique avec introduction et notes par Krystyna Kasprzyk, Champion 1980, I, p. 14. 以下『笑話集』への言及，引用は全てこの版により，ローマ数字で第何話かを，アラビア数字で頁数を指示する。

7) 《Et puys je me suys avisé que c'estoit icy le vray temps de les vous donner : car c'est aux malades qu'il fault medecine.》(I, p. 13)

8) *op. cit.*, p. 247.

9) John Harris, 《The arrangement of stories in Des Périers's *Nouvelles Récréations et Joyeux Devis*》, In *French Studies*, volume XXVIII, April 1984, pp.129-143.

XXXIII から XXXVI までの curé de Brou しかないが，II, III のそれぞれポワティエとランスのバスコントル，LXIX, LXX, LXXI のポワトゥー人，LXXIX, LXXX, LXXXI の巾着切り，LXXXVIII, LXXXIX の猿などは，類似の職業の者，同郷の者として，各話を関連づけており，ポワトゥー人や猿の話の場合には，《Je ne m'amuseray icy à vous faire les autres comptes des poytevins,》(LXX, p. 257) といった語り手自身による関連づけもみられる。

似たテーマによって話が続けられている最も明白な例は，*Cymbalum mundi* とも関連を持ち，Sozzi もあげている，錬金術に対する批判となっている XII, XIII であろう。Sozzi はさらに，XVIII, XIX をそれぞれジレとブロンドーの復讐，XX, XXI, XXII をラテン語の知識，XXIV, XXV, XXVI, XXVII を雌ラバと雌馬，XXXI, XXXII を不満足な女性の巧妙な応答，XXXVII, XXXVIII を「母なる自然」への賛歌，XLII, XLIII を言葉遊びと言葉の曖昧さ，などのテーマで結びつけているが[10]，この他にも各話のテーマの類似はみられる。例えば，VIII では，やもめとなった高等法院の検事が，若い田舎娘を囲い者にしようとしたが，書生に先を越されてしまったことが語られ，IX では，リヨンの商人が商用で留守にしている間に，隣人のアンドレに，妻の腹の中の子供の耳を完成する手伝いをされてしまった話となる。Hassell はこの二つの話にだましによる誘惑と女性の側でのナイーブな告白のテーマを認めており[11]，場所も登場人物も，表面的構成も異なるこの二つの話が，実は同じテーマであることがわかる。しかし，デ・ペリエは，類似のテーマを扱った話を続けても，それによって何らかの一貫性をもたらしたり，結論を引き出そうとするのではなく，あくまでもそれぞれの話で笑いを提供するだけであり，そのため，類似のテーマであっても，先の例のように全く同じテーマだけで語られていることは少ない。ラテン語による言葉の取り違えのおかしさを語っている XX, XXI についてみると，XX では付け焼刃のラテン語で，あやうく殺人犯にされるところであった三人兄弟の話が語られるのに対して，XXI は田舎司祭の奇妙なラテン語でやりこめられたパリ帰りの若者が，その奇妙なラテン語を使って，田舎司祭に復讐する話であり，別の要素，テーマも付加されて，バリエーションをもたらしている[12]。このようなバリエーションは，登場人物，場所の類似・一致による場合も同様で，curé de Brou の場合のように，全く

10) *op. cit.*, p. 247, n. 26.

11) *op. cit.*, vol. I, pp. 49-58.

12) XVIII, XIX の場合でも，XIX ではいたずら動物への復讐だけでなく，不意の富で不幸になったというテーマがつけ加えられている。

同一の登場人物による話でも，その人物の異なる面を語ろうとしている。

各話を関連づけて行く第三の方法は語り手の存在である。『笑話集』における語り手の役割全般については，Mc Farlane が分析を行っているが[13]，ここでは個々の話のつなぎの働きに絞って検討してみる。まずここで語り手という場合二つのレベルがあることに注意しておかねばならない。第一は『デカメロン』などでは「作者」とされているもので，個々の話の語られる状況などを語る役割のものであり，もう一つのレベルは個々の話の語り手である。『笑話集』では，『デカメロン』『エプタメロン』などとは異なり，第六話で Soissons の市民の一人が語り手となるのを唯一の例外として，この二つのレベルが同じ《je》で重ねられている。この《je》が次のようにはっきりと表面に出て語る時は，我々には何らかの強い意図が感じられるだろう。

《Il ne se faut pas esbahir si celles des champs ne sont gueres fines, veu que celles de la ville se laissent quelques foys abuser bien simplement. Vray est qu'il ne leur advient pas souvent. Car c'est es villes que les femmes font les bons tours, de par Dieu, c'est là. Car je veulx dire qu'il y avoit en la ville de Lyon une jeune femme honnestement belle : laquelle fut mariée à un marchand d'assez bonne traficque, . . . 》 (IX, p. 52)

先にもみたように VIII と IX の話は，テーマ的関連を持っていた。この IX の冒頭の文で，語り手は，VIII の田舎の話を想起させながら都市と対比させて，事情が同じことを語る。そしてその理由づけとして，《je》の形で姿を現したあと，IX のリヨンでの話にごく自然につないでゆく。このようにテーマや登場人物や場所で関連づけられている場合でも，それを強化する形で，語り手は《je》の形で姿を現わし，読者を続く話の中に引き込んでいく。

しかし語り手が登場するのは，何も以上のように単にスムーズにつなぐ役割を果たすためだけではない。XXVII, XXVIII, XXIX とメーヌ地方の話が続いたあとの XXX の冒頭では，次のように語られる。

《Il y ha bien peu de gens de nostre temps qui n'ayent ouy parler de maistre Jehan du Pontalais : duquel la memoire n'est pas encore vieille, ny des rencontres, brocardz et sornettes qu'il faisoit et disoit : ny des beaux jeux qu'il jouoit : ny comment il mit sa bosse contre celle d'un car-

13) I.D.McFarlane, 《Le personnage du narrateur dans les 《Nouvelles Récréations》》, In *La nouvelle française à la Renaissance*, Slatkine, 1981, pp. 307-318.

dinal, en luy montrant que deux montagnes s'entrerencontroyent bien, en despit du commun dire. Mais pourquoy dy je ceste là, quand il en faisoit un million de meilleures ? Mais j'en puis bien dire encore une ou deux.》(XXX, p. 140)

冒頭の《nostre》は単に読者と語り手を指すのではない。この《nostre》によって語り手は読者を共犯関係にまき込み，Jehan du Pontalais なる実在の人物を読者に既知のものとして提示するのである。そうして既にある程度の了解をこの人物についてこしらえておいてから，《je》の形で登場し，この人物について二・三つけ加えるとする。こうした一種の序は，先程みた語り手による単なる自然なつなぎではなく，話題を転換するために必要とされているのであり，ことに今のように同じ場所での話が続いたあとでは，欠くことのできないものであろう。『笑話集』の中では，こうした転換が，語り手の存在なしに，いきなりおこなわれることもあるが，語り手が存在している上のような例で，読者の関心がよりよくつなぎとめられることは明らかである。

語り手の存在は，各話のつなぎとしてだけ働いているのではない。実は，各話の内いくつかは，Sozzi の指摘[14]を待つまでもなく，数個のアネクドートから成り立っていることもある。こうした話は，登場人物や，内容の類似によって，一つのまとまった話として統一されているが，この個々のアネクドートを結びつける時にも語り手の登場する場合がある。例えば，第二話は，Caillette, Triboulet, Polite の三人の fou の話であるが，語り手は，Caillette から Triboulet へ，Triboulet から Polite へ話が転換する毎に，《A l'entrée de Rouan, je ne dy pas que Rouan entrast, mais l'entrée se faisoit à Rouan : Triboulet fut envoyé . . . 》(II, p. 21)，《Il y avoit un autre fol nommé Polite, qui estoit à un abbé de Bourgueil. Un jour, un matin, un soir, je ne sçaurois dire l'heure, Monsieur l'abbé avoit une belle garse toute vive couchée aupres de luy.》(II, p. 22) といった形で登場してくる。ここでは，つなぎの役を果たしているというよりも，話題の転換に際して，わざわざ小さなコメントをつけて，読者の注意を新しい話題の方へ呼び込もうとしている。

このように，語り手は，各話の間を関連づけ，転換させ，個々の話の中のアネクドートにおいても読者をつなぎとめようとしている。そして，こうした語り手の姿勢は個々の話を語る際にもみられる。

---

14) *op. cit.*, p. 244.

《Le clerc voyant la mine de ceste garse que son cas ne se portoit pas mal, *vous commence* à jouer avec elle, il la manie, il la baise. Elle disoit bien, 《Oh ma mere ne me l'ha pas dit》. Mais ce pendant mon clerc la *vous embrasse*: et elle se laissoit faire, tant elle estoit folle, pensant que ce fust la coustume et usance de la ville. Il la *vous renverse* toute vive sus un bahu : 》(souligné par nous) (VIII, pp. 50-51.)

書生が田舎娘を誑かすこの場面で使われている《vous》は，関心の与格と言われるもので，Sozzi も言うように，「読者と共犯関係を作り出し，読者を事件の証人としながら，語り手は，場面の生気と明白さを強調すると同時に，読者の関心を呼びおこしている」[15]のだが，特にこの場面では，動詞の現在時制とも相まって，著しい効果をあげていることは，同じ第八話の少し前の箇所で，諺に導かれた一般化から，主語の《vous》を経て関心の与格を用いる場合[16]と比べると一層明らかになるだろう。

この他に語り手は，1・2人称の所有形容詞を用いたり，《je》—《vous》を対話させたり，疑問を投げかけたりして，読者の興味・関心を保とうとしているが，これらは，Pérouse の指摘する[17] nouvelle が Noël の夜の語りものに起源を持つことから来るものかも知れない。

以上みてきたように，『笑話集』は第一話で設定された全体的テーマを語る各話が，テーマの類似や，語り手の存在などによってうまくつながれているのだが，以下第十話までを例にとって，その様子を確認してみよう。

第一話は先にも述べたように，全体の序としての役割も持っていたが，後半では Plaisantant というあだ名の男のエピソードを物語っている。この Plaisantant は Triboulet とも目されており，Plaisantant の天真爛漫さが，第二話の三人の fou の話へと通じさせる。第二話と第三話は特につながりはない。このことを十分考慮に入れていたのであろう，第二話の末尾では，《je》

15) *Ibid.*, p. 256. 《En établissant une complicité avec ses lecteurs,en les prenant à témoins des événements, notre conteur éveille leur attention en même temps qu'il accentue la vivacité et l'évidence des scènes.》

16) VIII, pp. 48-49. 《Si se pensa le procureur que ce seroit bien son cas, ayant ouy autrefoys un proverbe qui dit, sage amy et sotte amye. Car d'une amie trop fine vous n'en avez jamais bon compte. Elle vous joue tousjours quelque tour de son mestier : elle vous tire à tous les coups quelque argent de soubz l'aisle : ou elle veut estre trop brave : ou elle vous faict porter les cornes ou tout ensemble. Pour faire court : mon procureur . . .》

17) Gabriel- André Pérouse, 《Des nouvelles "vrayes comme évangile" Réflexion sur la présentation du récit bref au XVIe Siècle》, In *La Nouvelle, Définitions, Transformations*, Presses Universitaires de Lille, 1990, pp. 89-98.

—《vous》の対話によって一応の区切りをつけて，《Laissons les icy et allons chercher les sages.》(II, p. 23) と話題の転換を図るような言葉がみられる。既に述べたように第三話と第四話はテーマは異なるものの，共に主要登場人物がバスコントルであり，登場人物の類似により二つの話は結びついている。ただ第四話では，前半のバスコントルの当意即妙の応答の例示として，宮廷人の司教と司祭の応答がつけ加えられ，第五話の三人の娘も父親に見事に機知を働かせて答えている。語り手は第五話の末尾で，この三人の娘の応答を受けながら，たくみに話をコキュの方へと導く。そして Soissons の一市民が語る第六話は正しく，妻に裏切られた男の話となっている。第七話は，司祭になるためにローマに行ったが，ラテン語をうろ覚えにしていたために，法皇と奇妙な問答をしてしまったノルマンディーの男の話であり，第六話との関連はほとんどない。わずかに考えられるのが，第六話の末尾に置かれた，《Car un prebstre ne vault rien sans clerc》(VI, p. 43) という諺の中の《prebstre》という言葉で，この言葉による連想が第七話へとつなげていると思われる。第七話と第八話も特に特徴的な共通の要素はみられず，二つの話の主要登場人物が男やもめであることでかろうじてつながっている。第八話と第九話は，先に検討した通り，策略による誘惑のテーマでつながっていたが，第十話の書生 Fouquet も代訴人と顧客ともにお互いが耳が不自由だとだましたのであった。

このように見てくると，各話の間の関連は余り強いものではなく，ましてや話全体の一貫性を形成するというのでは全くない。むしろ，登場人物，場所，テーマの類似・一致や語り手の存在によって関連はつけられながらも，話はだんだんと横滑りし，ずれていっているのである。そして，今あげた手法というのも，実は，各話を関連づけるものと言うより，各話に入った時に，読者の関心を逸らさないように新しい話に引き込み，繋留めておくものであると言った方が正確であろう。『笑話集』では，こうして読者をうまく制御しながら，話題そのものは次々とずれていって，笑いの様々な側面が語られる。

Wetzel は『デカメロン』などにみられる枠組 Cadre の意味を社会・歴史的に検討した興味深い論文[18]で，『デカメロン』の枠組に当時のフィレンツェの上層市民階級の調和的・合理的生活によって現実的危機は統御されるというイデオロギーを，『エプタメロン』の枠組には生まれつつある絶対王制に結びつけられた階層の利害・関心の反映を見ているが，その例になられば，デ・ペリ

18) Hermann H. Wetzel, 《Elements socio-historiques d'un genre littéraire : L'Histoire de la nouvelle jusqu'à Cervantès》, In *La nouvelle française à la Renaissance*, Slatkine, 1981, pp. 41-78. 特に pp. 44-55 参照。

エの枠組をもたぬ『笑話集』の構成は，どう把えられるのか。既に見て来たように，『笑話集』は枠組を持たない代りに，序としての第一話で設定された笑いの主要テーマに沿いながら，個々の話の登場人物，場所，テーマの一致や類似，語り手の働きなどによって，第一話に述べられているように ordre は持たない[19]までも，様々な地方，人物，テーマの話を，読者を常に引きつけるように語られている。そして，こうした自由さを持ちながら，読者を飽きさせぬ構成こそ，哲学にとってもっとも扱いにくい，王侯・法皇から職人・巾着切りまで二百十人の『笑話集』の登場人物[20]によって示されるようなあらゆる種類の人間に属する笑いをとられる最良の方法であったと言えるのではないだろうか。

(D. 1986　大阪府立大学講師)

19) 《Et ne me venez point demander quelle ordonnance j'ay tenue. Car quel ordre fault il garder quand il est question de rire ?》(I, p. 15).

20) cf. Jean-Pierre Siméon, 《Classes sociales et antagonistes sociaux dans 《Les Nouvelles Récréations et Joyeux Devis》 de Bonaventure Des Périers》, In *La nouvelle française à la Renaissance*, Slatkine, 1981, pp. 318-351.